

平成 29 年度 第 1 回 総合事業サービスワーキンググループにおけるご意見

9 月 20 日に開催した「総合事業サービスワーキンググループ」において、委員の皆様よりいただいた主な意見は以下の通り。

○介護予防通所サービス

サービス内容に応じた利用者負担について

- ・多方面から検討が必要だが、現場で聞く声としては、デイサービスを利用するときに、月に 1 回利用しても 4 回利用しても利用者負担が同じなので、経済的にひっ迫している方の中には、1 回あたりの料金を希望している方もいる。
- ・料金に関しては、確かに入浴や送迎を提供してもしなくても同じという面があり、見直す必要も一定あると思うが、たとえ入浴や送迎がない方がいたとしても、それに合わせて切り分けた運営をできるわけではない。要介護の人まで一体的に受けているので、一部の総合事業利用者だけに体制を変えるのは難しい。
- ・これ以上の報酬の減算等があると存続が難しい事業者も相当数いると現場から聞いている。サービスの質と量に合わせた見直しができると思う。
- ・利用者負担とサービス内容の整合性をとる必要性はあると思うが、利用者・事業者それぞれの立場からは相いれない部分もある。もっと広い視点から 15～20 年後の神戸市全体の要介護状態を下げていくことを考えると、アセスメントの中で必要なサービス量の見極めを重視すべきだと思う。
- ・週あたりの利用回数に応じて報酬が決まるというのは、現状に近い形でいいのではないか。
- ・自立支援の視点と、利用者の負担感を軽減するため包括報酬の見直しが必要かと思う。

○生活支援訪問サービス

①従事者養成研修の修了者をいかに雇用につなげるかについて

- ・事業所は研修の修了者がどこにいるか分かっていない状態だと思う。
 - ・このサービスの求人がハローワークに合うか少し疑問がある。もう少し身近なところで需要と供給のマッチングのようなことができないか。
 - ・ハローワークへの登録と合わせて、『修了者バンク』のような形で研修を受けたら修了者名簿に登録され、事業所からアプローチして雇用されるような仕組みは考えられないか。
- （事務局）就労のあっせんは神戸市としてはできないので、ハローワークへの登録を促す等、あっせんに至らない範囲で何ができるかだと思う。

②訪問型サービスの対象者について

- ・29 年 4 月からアセスメントシートの見直しがあり、情報収集だけでなく分析もしっかりできるよう変わった。家事援助で足りるのか、専門性が必要なかを見極めるようになっている。

このようなアセスメントを経てその方に必要なサービスを利用するというのが本来であるが、現在は生活支援訪問サービスの事業所が地域に少なく担い手も不足しているので、地域に事業所がない場合に介護予防訪問サービスを利用していただくという例外的な取扱いもやむを得ないかと思う。

○住民主体訪問サービス

サービス提供及び利用の拡大について

- ・2号サービス（介護保険制度の訪問介護では提供できないサービス）のみを提供した場合は、補助金の対象となる件数としてカウントできないという制約があり、柔軟なサービス提供が難しい。また、料金面で利用者にとってのメリットがないため、あんしんすこやかセンターの立場からも、紹介しづらいのではないかと。
 - ・何をどのように提供するか調整するコーディネーターは絶対に必要であり、通常は利用料の中からわずかに事務経費としてとっているが、この補助金はコーディネーター経費にあてることができるものになっている。ただ、これまでサービスを実施している NPO 法人等は、介護保険で提供できない部分を主眼に置いて活動されているので、補助の要件とマッチしにくいのかと思う。
 - ・2号サービスのみでも補助の対象にするなど、柔軟な対応はできないか。
- （事務局）総合事業の事業費の財源に国費・県費・市費や保険料が入っているので、国の要綱に基づいて一定の要件がある。

○地域拠点型一般介護予防事業

事業者の確保（全小学校区での実施）について

- ・委託料については、利用者数の幅の中では定額となっているが、もう少し、より実態に応じた対応をしてほしい。
- ・場所の確保については、学校の空き教室や空き家など地域資源の洗い出しが必要かもしれない。
- ・人材確保の観点からは、市が今年度から始めた「生活支援・介護予防サポーター養成研修」のグループリーダー研修を受けた方で、空白地域に住んでいる方にアプローチしていくことも考えられる。また、地域団体や社会福祉法人も地域貢献として協力してもらうことも必要ではないか。
- ・空白地域の高齢化率や人口動態を分析することで、今後より需要が見込まれる地域が分かるようになるなど、何か糸口が掴めるかもしれない。
- ・介護予防に力を入れているのは良いと思われる。世代間交流なども積極的に行っていったらどうか。